菅木志雄

Kisho Suga

鎌倉画廊 コンテンポラリーアート
中央区銀座7－10－8 平方ビル1F
TEL. 03－574－8307

菅　木志雄展

KISHIO SUGA

1986年1月9日㈭－1月25日㈯

「空間の溜り、芸術の着床」

モノがある。働きかける人がある。その間に何らかの作法がある。しかし、モノはその都度あらたまり、飼い馴らされず、繰返されず、従って、「ある芸術」に固有の媒体となる気配を見せない。固有の媒体がないから、この「ある芸術」は、一見したところ、造形芸術としての確たる形式をもたぬ風情で、捉えがたい。モノと作法、モノと関係概念は、約束の媒介項を欠いてその都度生々しく直結し、いわば、利休によって原理的レベルに還された刹那の茶道にも似た、純粋状態を保つことになる。

これが、過去15年間、菅木志雄が身をもって示しつづけてきた稀有な芸術の姿であった。モノよりもその依存関係における存在のリアリティーを、空間よりもその相対的な働きの場としての状況を、根幹とする。このような芸術を、私たちは近代以降のメジャー・アートの舞台で見たことがなかった。だからこそ、私たちは菅の芸術の成行きに尋常ならざる関心を寄せてきたのである。と同時に、芸術の継承性（模倣されやすさではない）という点で一抹の不安を抱かずにはいられなかった。

媒体は繰返され、再耕作され、継承されうるが、作法は模倣されるほかない。モノと空間を芸術専用の媒体として扱うことを拒否した菅の芸術は、先行するあれこれの具体的な芸術に負うところがほとんどなかったかわりに、いい意味での継承性にも無関心であるかに見えた。

だが、私の思い違いでなければ、こうした菅の芸術に、最近、見逃がしがたい変化が生じ始めたようである。変化というより、何かの定着と評した方が適切かも知れない。さらさらと潮の流れゆくにまかせてきた真珠貝が、内肌にゴミ（核としてのモノ）を定着させ、そのまわりに玉虫色のふくらみをつけ始める。それに似たある定着と堆積の気配が見られるようになったのである。

そう思わせてくれた最初のきっかけは、昨年9月、かねこ・あーとギャラリーでの個展であった。矩形の板のタブローの上に、紙のへりを折り上げて浅い空間を抱くような恰好にした四角い紙のプールが1つないし数個取り付けられている。水のない水盤の形である。壁に掛けられていたから、それらは物理的にはレリーフと称してよかった。が、近年盛行している構成的ないしオブジェ的なレリーフの類いではない。実際の空間をタブローの形状に即して平面上で捕捉しているそのさまからして、1960年代初に平面からレリーフや立体に移行しようとしていた一群のアメリカ美術家たち（ジャッド、ルウィットら）の作品に一脈通じるものがあると評した方がよかった。

だが、それ以上に、それは、端的に言って、私に狗巻賢二を思い起こさせてくれた。1970年、あの『東京ビエンナーレ』で、狗巻が美術館の空間的限定に対応させるようにしてつくった大きな紙のプールのことである。スケールと作品の支え（床と壁）には大きな違いがある。けれども、どちらも、一定の限定的な場（一方は展示室、他方はタブロー）の内側に、それと対応してもう一つの空間の溜り（器であると同時に内容でもある）を抱かせている点では同じだった。しかも、その手段として、軽やかな紙の四辺のへりを浅く折り上げるという工夫を行なっている。そうすることによって、菅は、かつての狗巻と同様、空間を物体の代用物としてからめ取るのではなく、開いたものとして、しかもなお具体的な状況の諸条件のなかで一定の定着性を具えたものとして、つまりは、状況の核、なんなら造形の核となりうるものとして、具体化することに成功しているのである。

これは少なからぬ発見だった。菅の作品に、比較的近年の先人の作品の面影を見るなどということは絶えてなかったことだからである。菅が学生時代にアメリカのミニマル・アートを研究したことも、70年代に入って狗巻をことのほか尊敬していたことも、私はよく知っている。しかし、これまでの彼の仕事に、その具体的なしるしを見たことはなかった。「狗巻」を思い起こしたのは一観客の勝手とはいえ、やはりこれは新しい事態にちがいない。

独立独行15年、菅はついに疲れたのだろうか。

否、否。作品から受ける印象はまるで逆だった。菅は、疲れて先例にならったどころではない。彼はついに、継

峯村敏明　TOSHIAKI MINEMURA

承可能な空間処方の種子を自らの表現の器に植え込むことに同意した、そしてそうするだけの二枚腰の強さを獲得したのではあるまいか。旧知の狗巻の、彫刻に由来する手法を「空間の溜り」と解釈して自分の作品形成の輪に引き込んだとき、彼は、空間を、継承可能で形式的に批判展開することの可能な一種の媒体として受納したのではあるまいか。

翌々11月、横浜市民ギャラリーの『今日の作家展』に出品された菅のインスタレーション作品は、この推量を肯定的に裏打ちしてくれるものだった。水なき水盤は、こんどはカラー鉄板（トタン）で現実空間のスケールをもってつくられ、タブローの上ではなく、美術館の床の上を、互いに連接し合いながら、水平に展開し、ときには内接して重なったりしている。

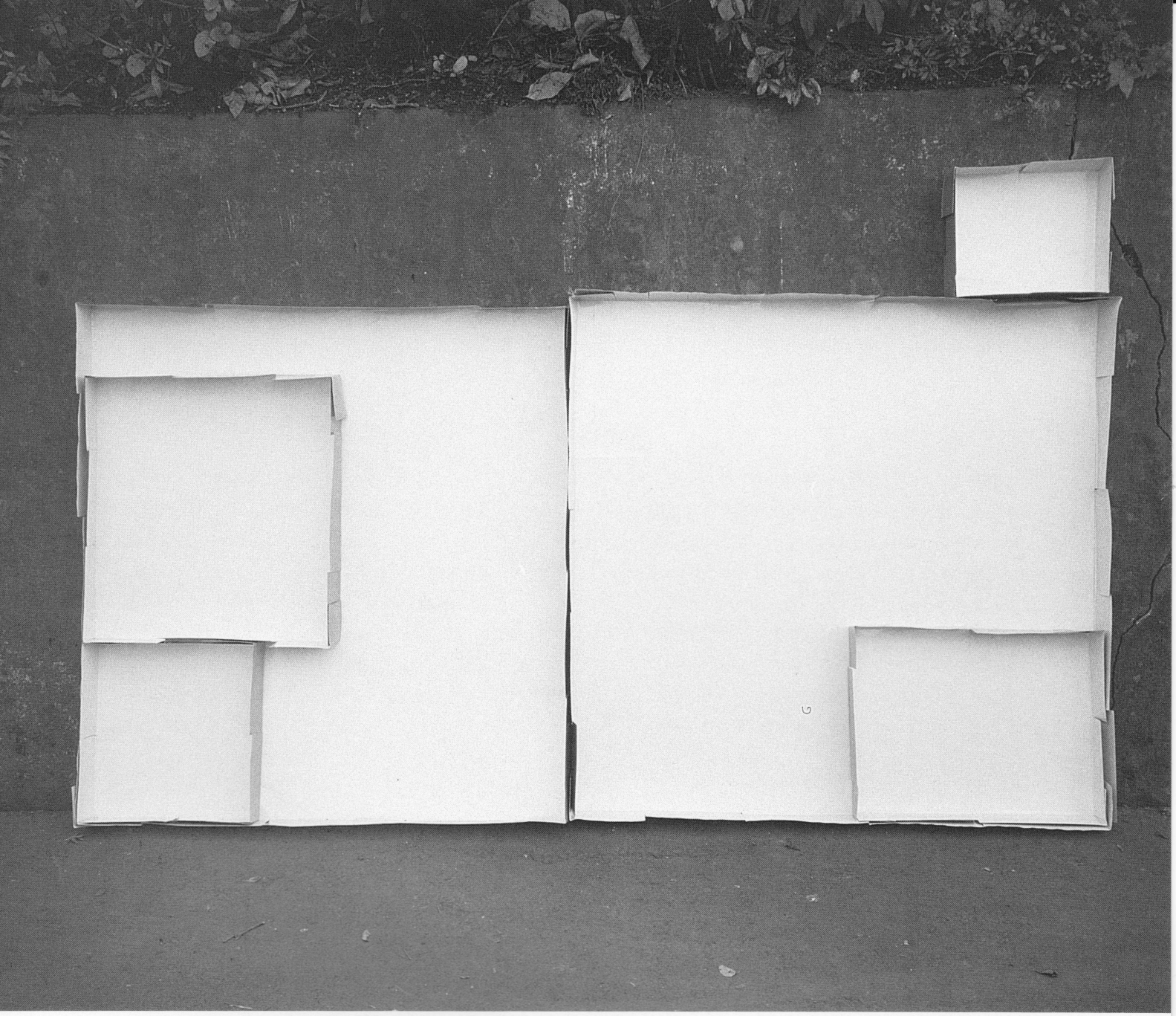
狗巻作品を思い起こさせる要素がさらに増していることは言うまでもない。が、それ以上に目ざましいのは、かねこ・あーとギャラリー出品の前作との間に、はっきりと形式上の展開が見られることである。かねこでのレリーフは、タブローの形と場所性に著しく規定されたものだった。従って、ジャッドや狗巻がミニマリストとしての感性からして「空間の溜り」を場の求心力と遠心力の張り合う中間に位置づけようとしていたやり方に、大筋のところ準じるものだった。ところが、横浜の床作品では、水盤形の「空間の溜り」はそれ自体に何がしかの凝集力、粘着力、連接能力を具えていて、場に対しては相対的な自立性を獲得しているのである。つまり、横浜の菅は、ミニマリストの窮屈な場との関係からも、彼自身のかつての等価同質な空間分節の作法からも離脱して、ある「空間の溜り」を彼自身の芸術の原基的な細胞として所有し始めたらしいのである。

この原基的な細胞としての「空間の溜り」――。私に「定着」の気配を感じさせたのは、この「溜り」にほかならなかった。他の作品、たとえば、昨年中に並行して発表された数次にわたる大谷石のある作品でも、この「溜り」はある。柵のように立てられた石柱の上端がかつてなく丁寧に角を落とされて、再使用可能な、馴致された姿を見せている。繰返され、再耕作され、継承されうるもの、すなわち、「ある芸術」に固有たりうる媒体の気配が、そこにも見られるのである。

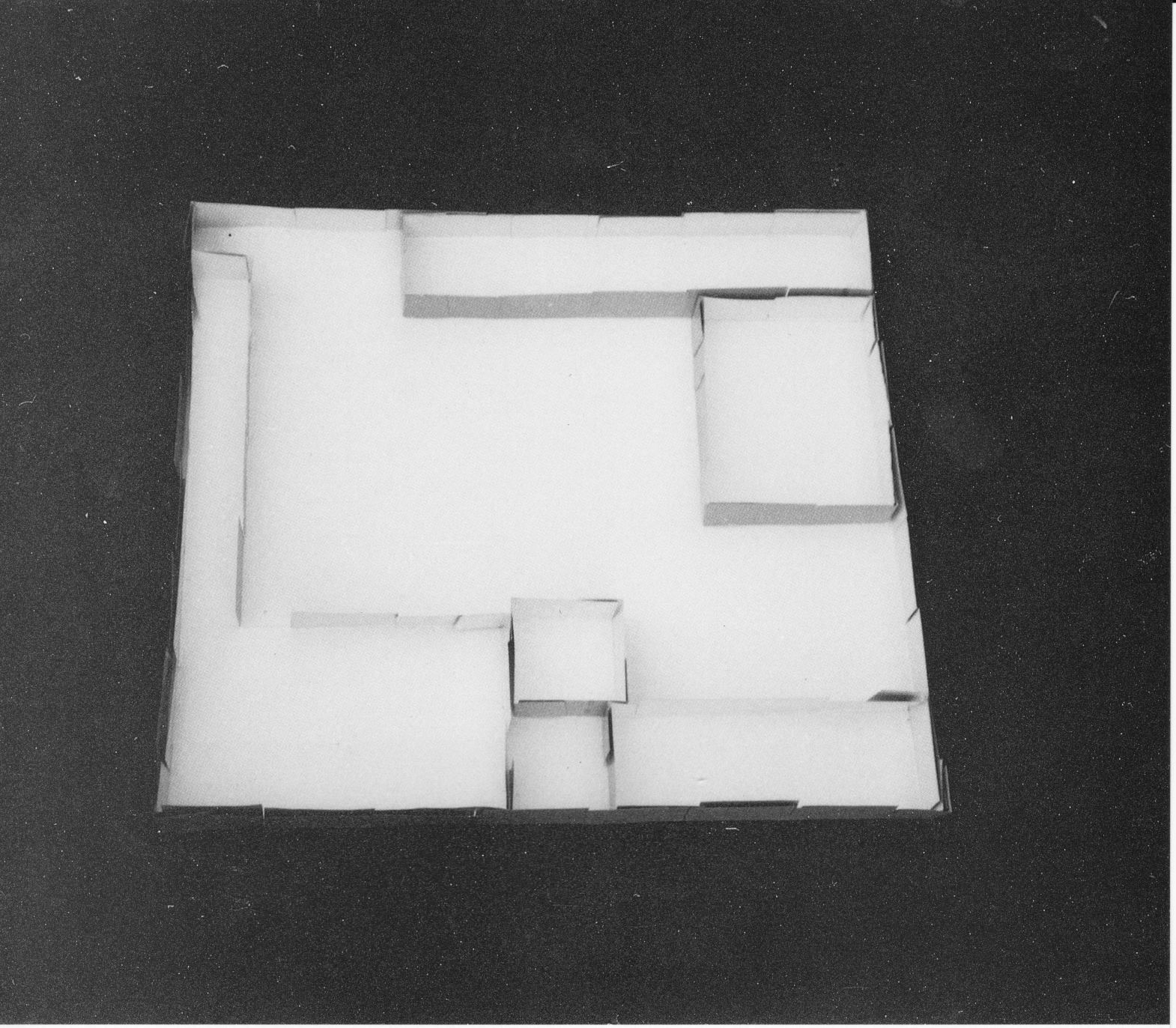
こんどの個展で、私たちはこの「空間の溜り」がますます強い自立性と可塑性を、すなわち自己形成能力を高めてゆく貴重な過程に立ち会うことになるだろう。通し題名の「スクウェア・ポンド」が暗示するように、ここでは場であることとモノであること、器であることと内容であること、素材であることと表現であることとが、互換的に、分かちがたく、一つの両義的なボディーとして実現されている。四角と見えたものは器(池)であり、だが、器と見えたものは実は「空間の溜り」を湛えた細胞であり、細胞と見えたものは、その実……。この環は閉じることがない。この尽きることのない両義性の連鎖こそ、およそ豊かな芸術が、古来、神様から授かってきた（その芸術に固有の）媒体の属性ではなかったろうか。

コレが菅の芸術の媒体だと、言葉をもって指し示すことはまだ許されないかも知れない。いや、今後とも、この類いなく柔軟な芸術は輪郭確かな媒体をも呼称をも滑り抜けてゆくにちがいない。とはいえ、いま形成－変容－組替えられつつある菅の空間の溜り（ポンド）は、私たちが一般に芸術的媒体とそれがもつべき形式に対して期待しているものと同質のものを、すでに機能させ始めているのではあるまいか。

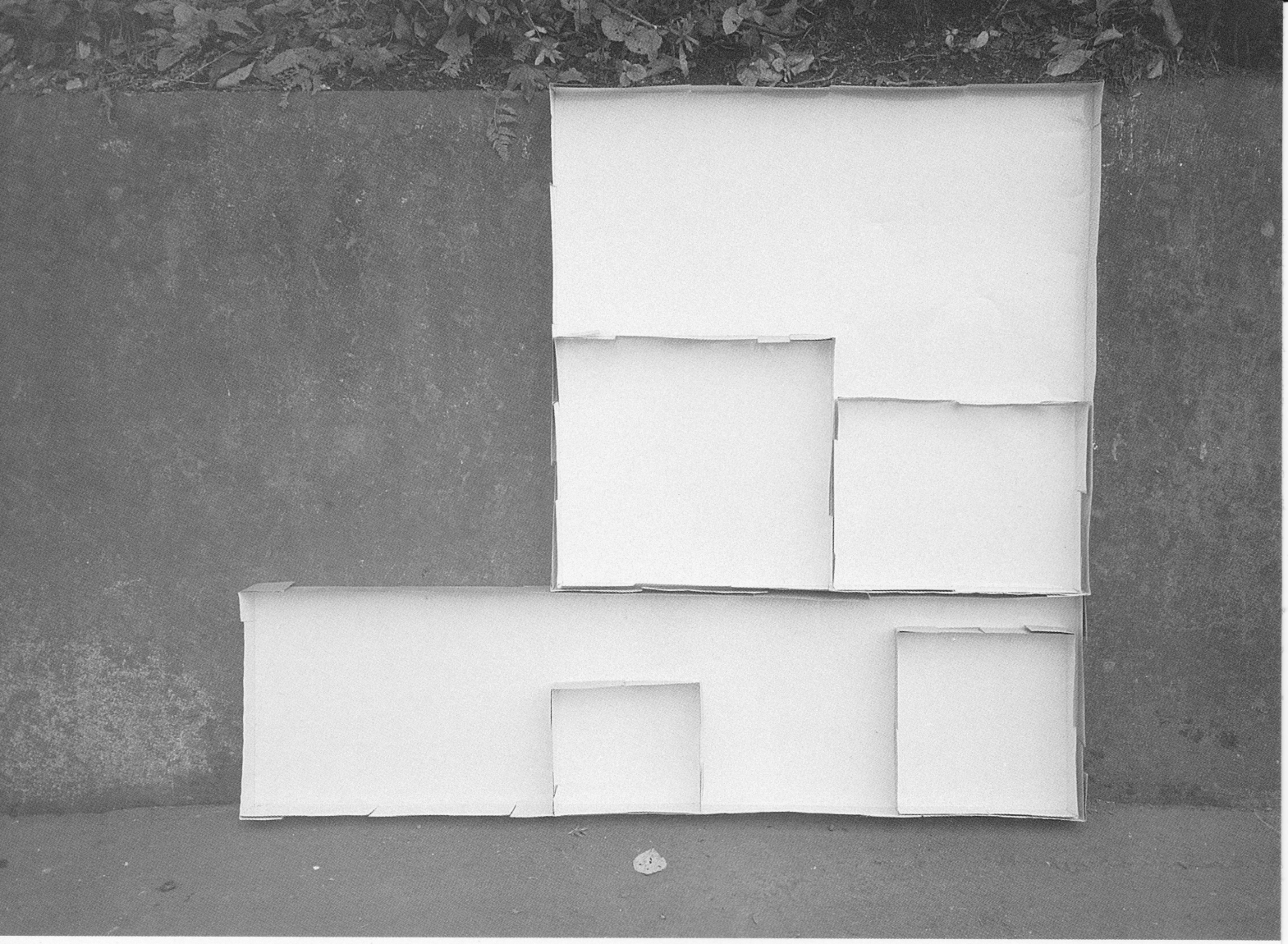
事実、こんどの作品は、その空間の溜りによって、モノの自立と依存との弁証法的関係をある種の官能性を帯びて肉体化しており、出色である。概念的図式やインスタレーション一般の暗愚は、その影もない。ミニマルを受け継いで、モノ派を貫いて、だがそれらすべてを乗り越えて、いま、菅木志雄は新しい段階に入ろうとしている。流産召さるな。



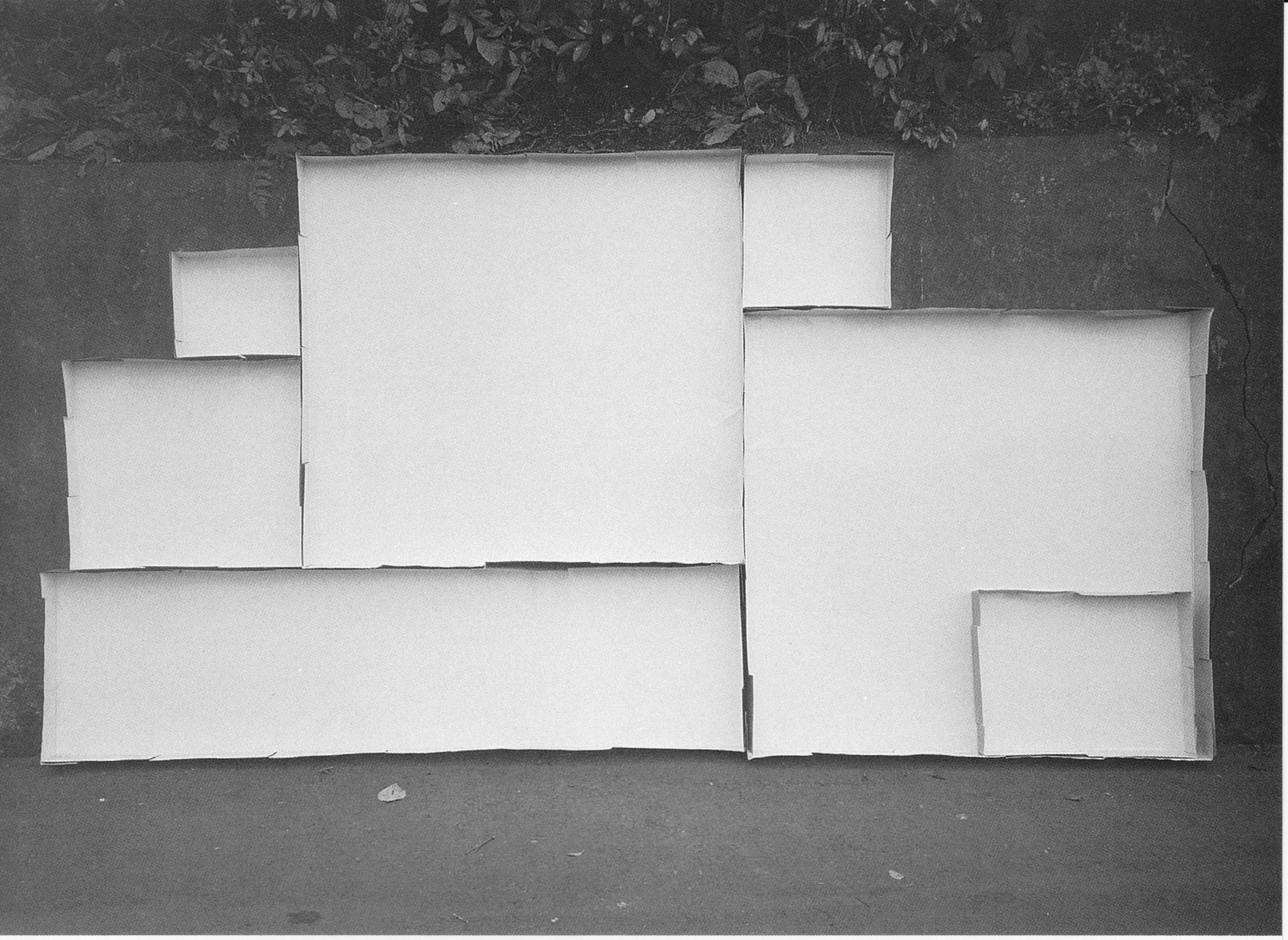
〈スクウェア・ポンド――明〉
カラー鉄板、ホワイト・グレー
2m10cm×1m30cm×7cm



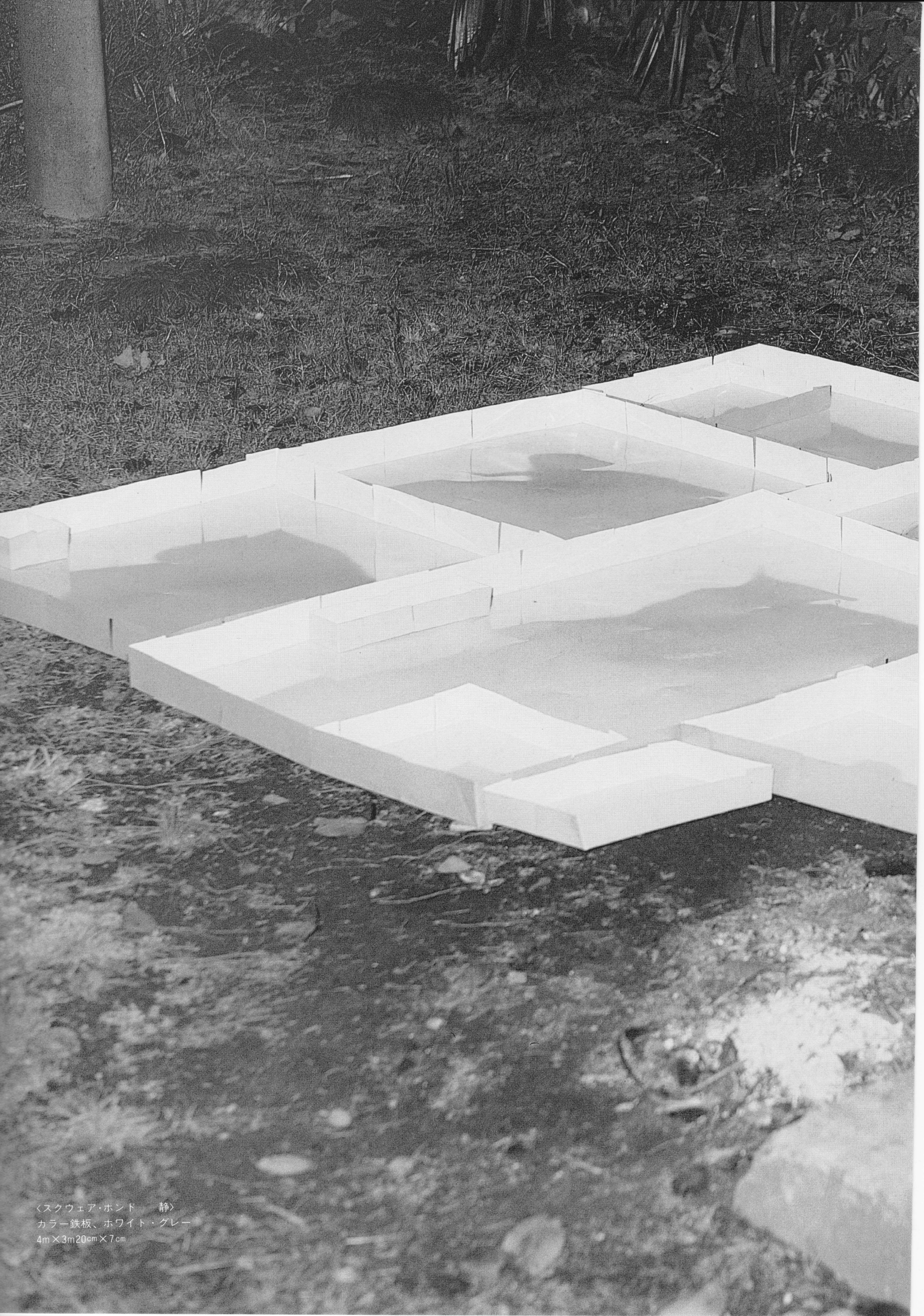
〈スクウェア・ポンド――中〉
カラー鉄板、ホワイト・グレー
1m×1m×7cm



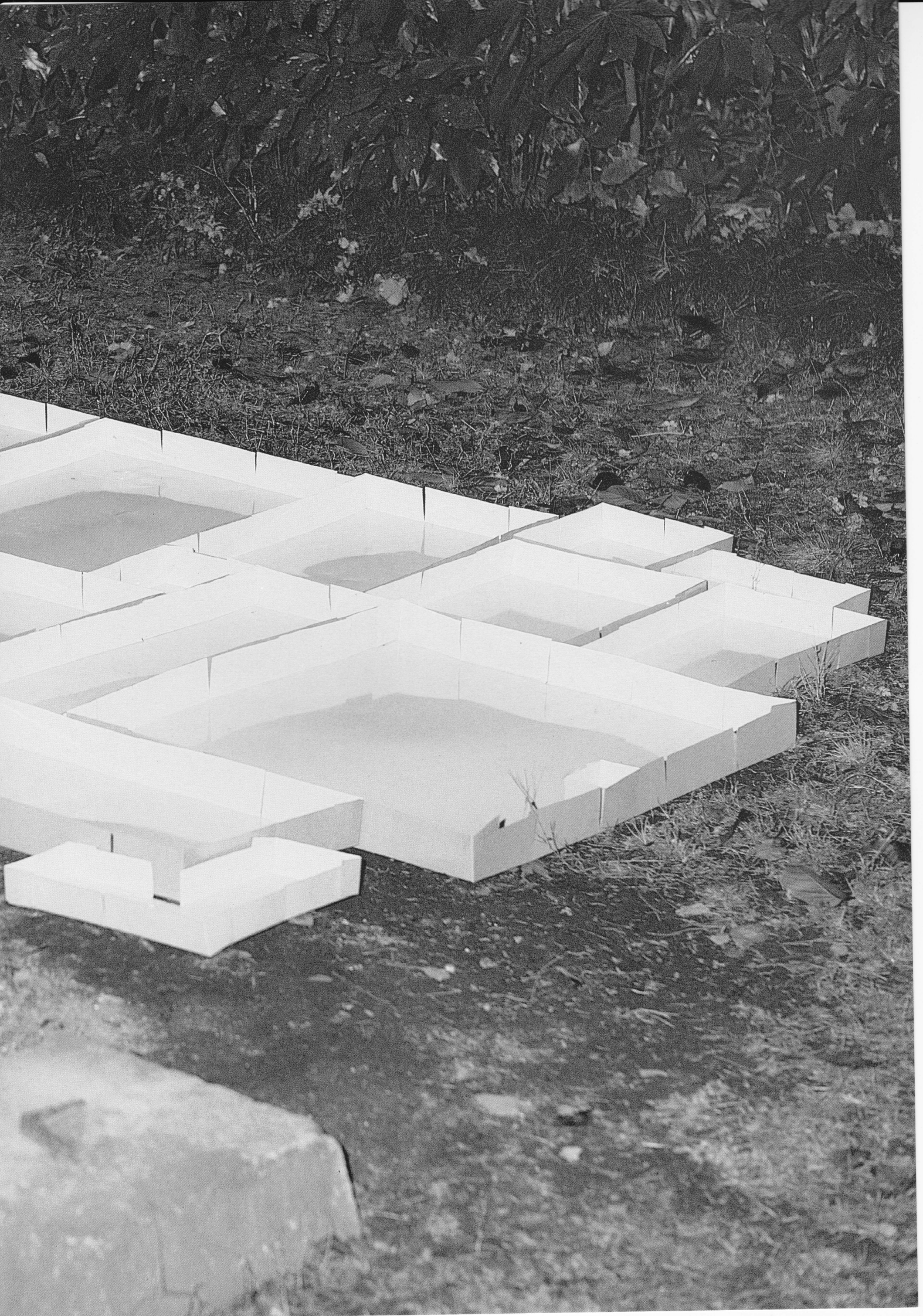
〈スクウェア・ポンド――立〉
カラー鉄板、ホワイト・グレー
2m×1m50cm×7cm

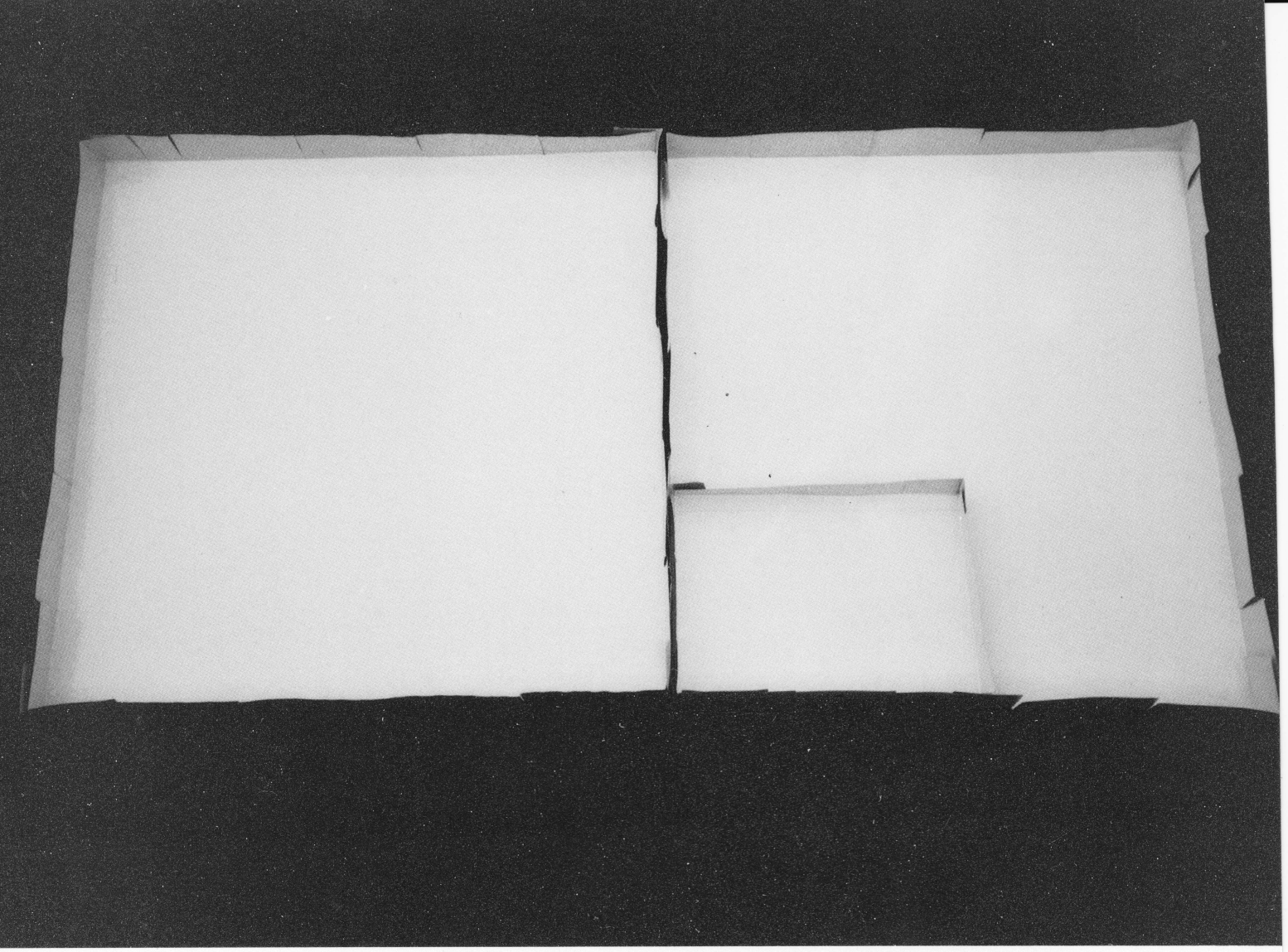


〈スクウェア・ポンド――下〉
カラー鉄板、ホワイト・グレー
3m×1m50cm×7cm

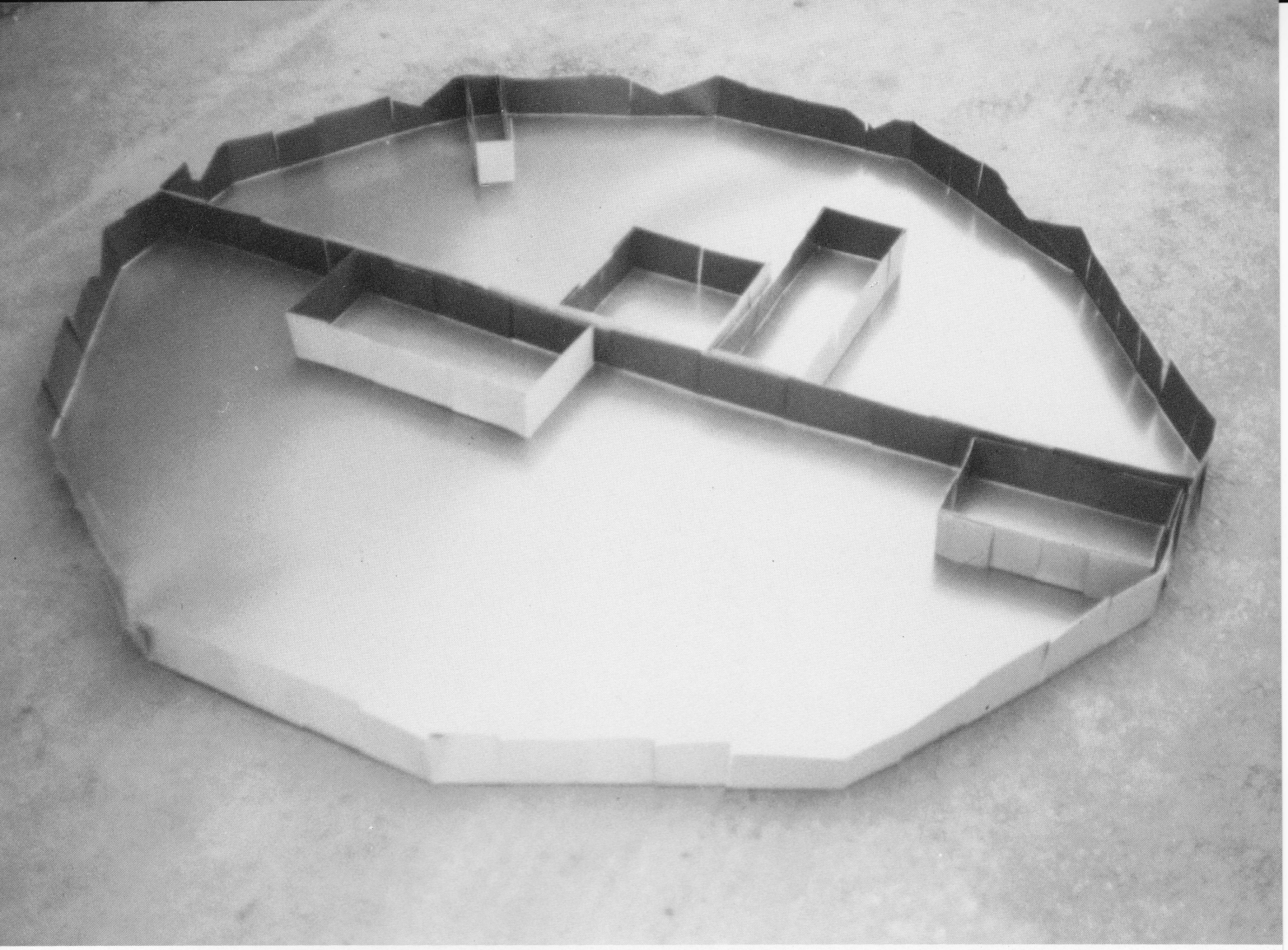


〈スクウェア・ホンド　静〉
カラー鉄板、ホワイト・グレー
4m×3m20cm×7cm

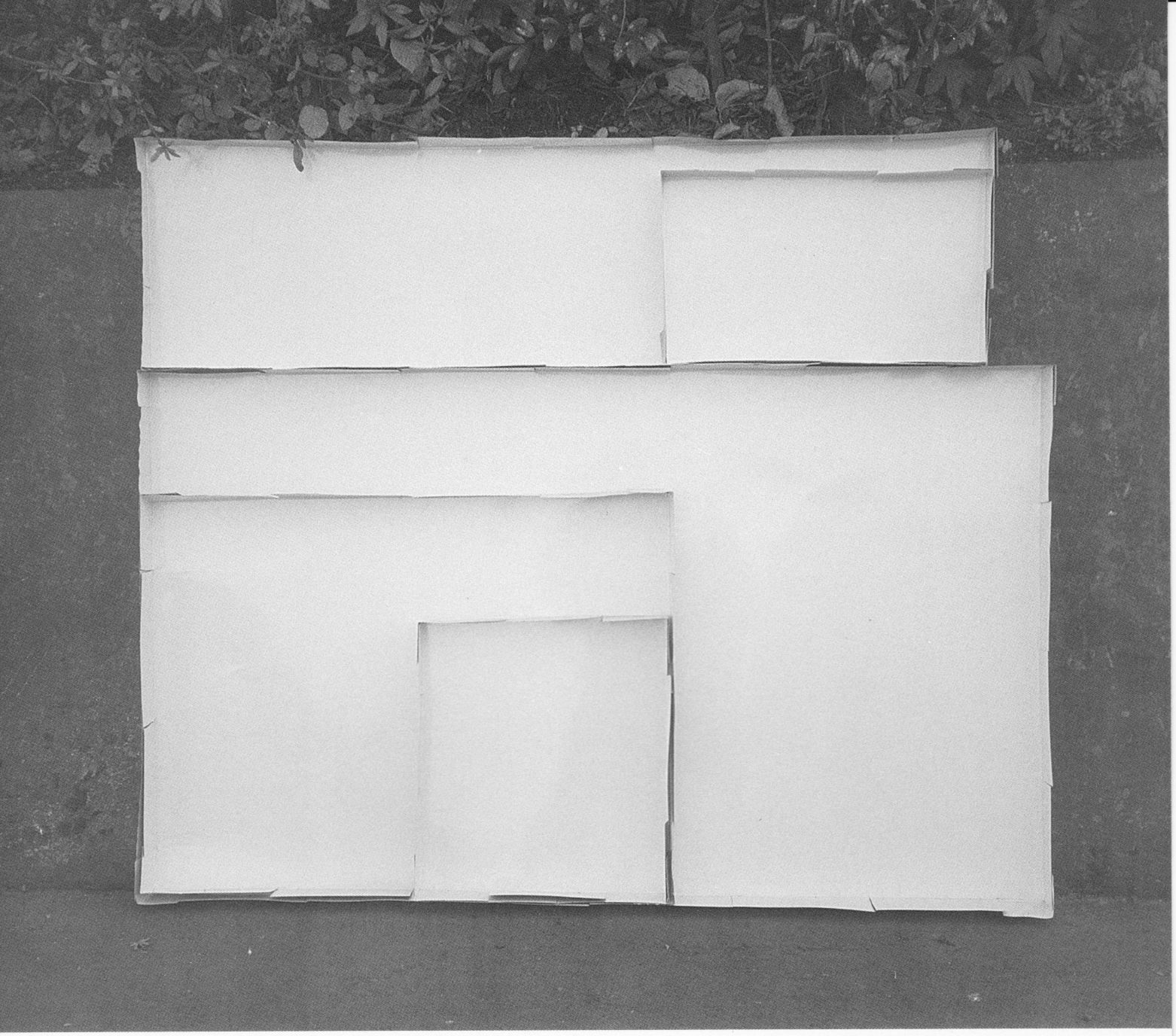




〈スクウェア・ポンド――間〉
カラー鉄板、ホワイト・グレー
2m×1m×7cm



〈スクウェア・ポンド——位〉
カラー鉄板、セピア・グレー
2m×1m80cm×8cm



〈スクウェア・ポンド――対〉
カラー鉄板、ホワイト・グレー
1m80cm×1m30cm×7cm

〈スクウェア・ポンド——低〉
カラー鉄板、セピア・グレー
3m×1m80cm×8cm

菅 木志雄　KISHIO SUGA

1944　岩手県盛岡市に生まれる
1968　多摩美術大学絵画科卒業

個　展

1969——個展〝並列層〟　田村画廊〈東京〉
1972——個展〝臨界状況〟　田村画廊〈東京〉
1973——個展〝依存差〟　サトウ画廊〈東京〉
1975——個展〝位況〟　ときわ画廊〈東京〉
——個展〝紙材による平面Ⅰ〟かねこ・あーと・ギャラリー〈東京〉
1976——個展　東京画廊〈東京〉
1977——個展〝連界〟　新田村画廊〈東京〉
——個展〝界〟　アクムラトリーⅡ〈ポーランド〉
1978——個展　村松画廊〈東京〉
1979——個展〝界入差〟　東京画廊〈東京〉
1980——個展〝体律〟　白樺画廊〈東京〉
1981——個展〝Protrution〟　東京画廊〈東京〉
1982——個展〝Instaration〟　ボードァン・ルボン〈パリ・フランス〉
1983——個展〝接の界、界入〟　東京画廊〈東京〉
1985——個展〝縁の内外〟　かねこ・あーと・ギャラリー〈東京〉
——個展〝支空〟　Soo(スー)Gallery　Taegu(テーグ)〈Korea〉

グループ展

1967——第4回国際青年美術家展　西武デパート〈東京、フランス〉
——ユニバーシアード展　伊勢丹デパート〈東京〉
——第Ⅱ回シェル美術賞展　白木屋デパート〈東京〉
1970——第5回ジャパン・アート・フェスティバル
東京国立近代美術館〈東京〉
——1970年8月展〝現代美術の一断面〟東京国立近代美術館〈東京〉
——現代美術の動向展　京都国立近代美術館〈京都〉
——今日の作家展　横浜市民ギャラリー〈横浜〉
1971——第10回現代日本美術展　東京都美術館〈東京〉
——第4回日本現代彫刻展　宇部野外彫刻美術館〈宇部〉
——プリント1972ねん展　シロタ画廊〈東京〉
1972——第1回現代日本グラフィック展　LCA.〈ロンドン〉
——〝Print Art 9〟　サトウ画廊〈東京〉
——ベスビオ大作戦プロジェクト展　南画廊〈東京〉
1973——第9回ジャパン・アート・フェスティバル
東京セントラル美術館〈東京〉
——第8回パリ青年ビエンナーレ
パリ国立近代美術館及びパリ市立美術館〈パリ〉
1974——〝宇宙(コスモス)——日本の現代作家のセリグラフィによるイメージの実験展〟　サンパウロ美術館〈ブラジル〉
——〝近代日本美術展－日本－伝統と現代〟
デュツセルドルフ市立美術館〈デュツセルドルフ、西ドイツ〉
——現代日本美術展　ルイジアナ美術館〈デンマーク〉
1975——〝宇宙(コスモス)——日本の現代作家のセリグラフィによるイメージの実験展〟　サンパウロ美術館〈ブラジル〉
——現代の映像　アート・コア・ホール〈京都〉
——資料展　オルガナイサン・Peter・Van・Beveren・
ステデリック美術館〈オランダ〉
1976——イタリアの七人の作家と日本の七人の作家－新しい認識による方法－　イタリア文化会館〈東京〉
——シドニービエンナーレ　シドニー美術館〈オーストラリア〉
——今(now)展　エーウィング画廊〈メルボルン、オーストラリア〉
1977——東京画廊作家展　東京画廊〈東京〉
——現代美術の5人展　かねこ・あーと・ギャラリー〈東京〉
——日米現代美術交換展　神奈川県民ギャラリー〈横浜〉
——今日の作家展＝絵画の豊かさ＝横浜市民ギャラリー〈横浜〉
——汎概念'77　真木画廊〈東京〉
——〝03・23・03－国際現代美術再構築展〟
カナダ・ナショナルギャラリー〈モントレー、オタワ、カナダ〉
1978——ベニス・ビエンナーレ〈イタリア〉
——今日の作家展＝表現の仕組み＝　横浜市民ギャラリー〈横浜〉
1979——菅木志雄、高橋雅之、李禹煥、駒井画廊〈東京〉
——今日の作家展　横浜市民ギャラリー〈横浜〉
——東京画廊作家展　東京画廊〈東京〉
——LIS '79　リスボン・インターナショナル・ショウ・
ドローイング国際展〈リスボン、ポルトガル〉
1980——シェル美術賞選抜展　東京セントラル美術館〈東京〉
——東京画廊作家展　東京画廊〈東京〉
——現代美術の3人展（菅、桑山、山田）福岡市美術館〈福岡〉
——現代版画・1980　栃木県立美術館〈宇都宮〉
1981——平行芸術展　峯村敏明オルガナイズ　小原流会館〈東京〉
——パフォマンス・イン・ビデオ　福岡市美術館〈福岡〉
——余韻　グリフォンギャラリー、ビクトリアカレッジのギャラリー〈メルボルン、オーストラリア〉
——〝日本現代美術展・70年代日本美術の動向展〟
韓国現代美術館〈ソウル、韓国〉
——16回サンパウロビエンナーレ
PARQUE IBIRA PUERA〈サンパウロ、ブラジル〉
——Lis'81・リスボン国際ドローイング展〈リスボン、ポルトガル〉
——開館記念現代日本の美術展　宮城県立美術館〈仙台〉
——ARTEDER'82　国際グラフィック・アート展
ビルバオ国際アートセンター〈ビルバオ、イスパニア〉

1982——第4回シドニービエンナーレ・1982ビデオセレクション
パフォーマンスによる　シドニー美術館〈オーストラリア〉
——プリント・アートショウ　ストライプハウス美術館〈東京〉
——多摩美術大学特別展〈東京〉
——〝カーネギーインターナショナル〟
カーネギー美術館〈ピッツバーグ、アメリカ〉
——第1回現代彫刻・立体展
西武・高輪プリンスホテル本館・地階〈東京〉
——6thワークショップ〝展〟
県民ギャラリー・宮城県立美術館〈仙台〉
1983——第1回現代彫刻・立体展　西武美術館〈東京〉
——〝木のかたちとエスプリ〟展　埼玉県立美術館〈埼玉〉
1984——〝1970年代展〟　鎌倉画廊〈東京〉
——〝日仏会館ポスター原画展〟　西武美術館〈東京〉
——〝現代東北美術の状況展〟　福島県立美術館〈福島〉
1985——〝現代彫刻の歩み－木の造型〟
神奈川県民ホールギャラリー〈横浜〉
——〝第2回シューボックス展〟　ハワイ大学モアナギャラリー
〈ハワイ〉
——〝日本アーティストブック展〟
フランクリンファーネス〈ニューヨーク〉
——〝今日の作家展　インスタレーションとはなにか〟
横浜市民ギャラリー〈横浜〉
——〝第2回アジア美術展〟　福岡市美術館〈福岡〉
——〝現代美術の40年〟　東京都美術館〈東京〉
——〝水彩による表現〟　鎌倉画廊〈東京〉
——〝和紙による造形展〟
ホールシド(Halle Sud)　〈ジュネーブ、スイス〉

菅 木志雄展カタログ
発行日　1986年1月9日
発行者　中村路子
製　作　鎌倉画廊

鎌倉画廊 コンテンポラリーアート
中央区銀座7-10-8平方ビル1F
TEL.03-574-8307

Kamakura Gallery 7-10-8Ginza, Chuo-ku, Tokyo Tel. 03-574-8307